



英對暖語四編

上

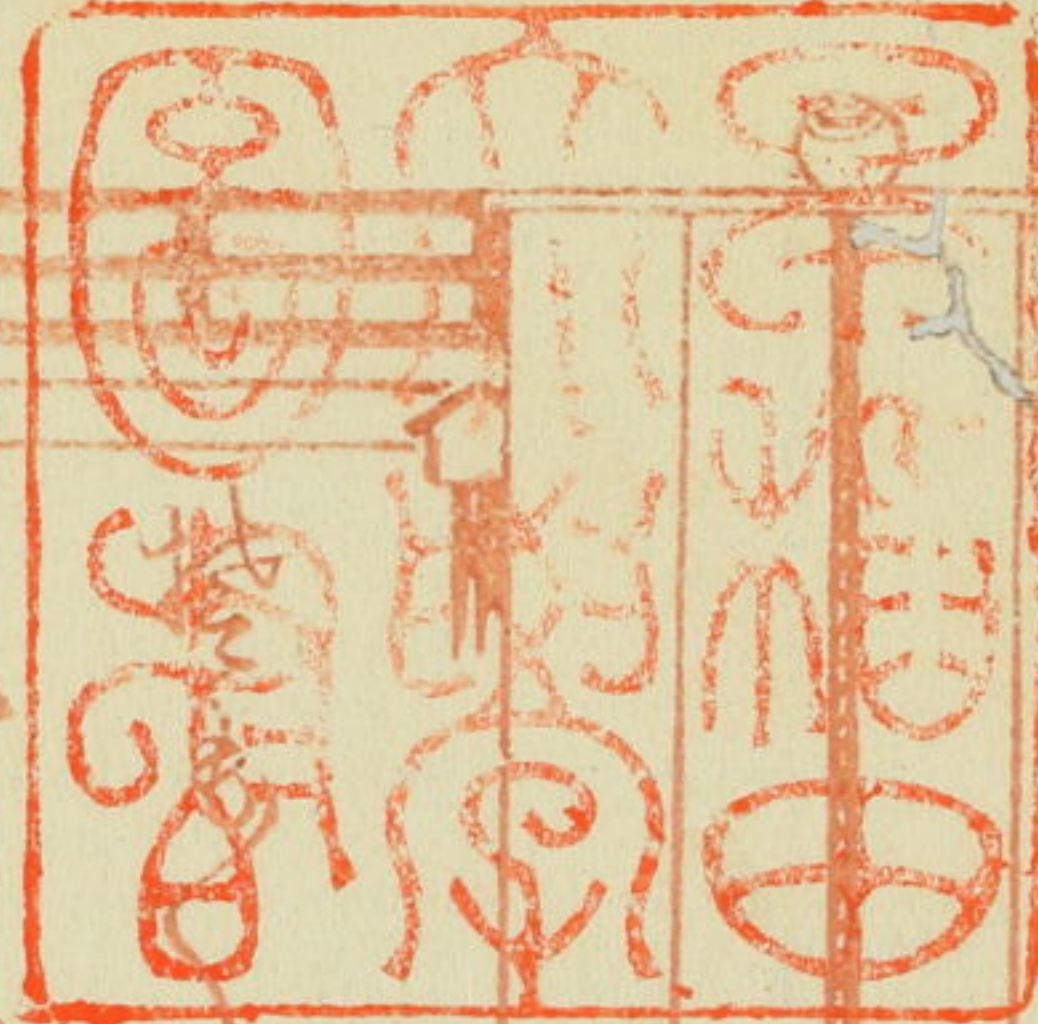
48
へ遠13
840
10



遠門

號 840

卷 10



明治三六年
十月十八日
購



橋の始り、満時より千二百餘年の
 入皇三十七代孝徳天皇の大化二年、法
 相宗の開山ありけり。道昭和尚が工夫あり。山城國
 宇治川におもむきて橋を架してより、國家の舟
 由を致さむと。まをちと船の始り、橋よりは

○新羅前出。人皇十代崇神天皇の五年

七月諸國小勅。造る。其製

○くわーわらび十六代の帝應神天皇の五年。伊

豆園づのゑんふく造りつくり出せい。國用の益えき多おほうりい。其その益えき

○もろあえ造り。日金山ひかみやまの楠くすのぎ少すく。長なが十丈おとぢう余よ舟

ふらふらとと。漕こええややその御ご船ふねの綱つなを繩ひもををどど引

○ともぬ別わかきあるるええとと隆たか清きよ朝あそのの造つくりりり

松まつををぶぶりり。家根やね船ふねとと續つづきき唱な喚わんのの文ぶん句くををるる。

○送り迎おくひむかの辰たつみ巳み船ふね。魔利支天まろしあてん河か岸がし走はしるるすすん

楳かのの牙き乃な船ふねふふ其そのむむりり。明曆めいれき萬治まんじのの年とし間ま

○子こ。押おし送くりりの長吉ちやうきちとといいふふ者ものがが舟ふねをを業わざ研けんの

ううらら子こ作つくりり魚うま若わかをを積たくむむ押おし来くるるふふ矣や。より

○毛け早はやきき風ふう情じやうをを見みるる。三谷さんや舟ふねのの船ふね長なががが情じやうと

考かんがへへ付つ通とほひひ踏ふ急いそぐぐ川か船ふね小こ。ままはは成なりははととりりここ

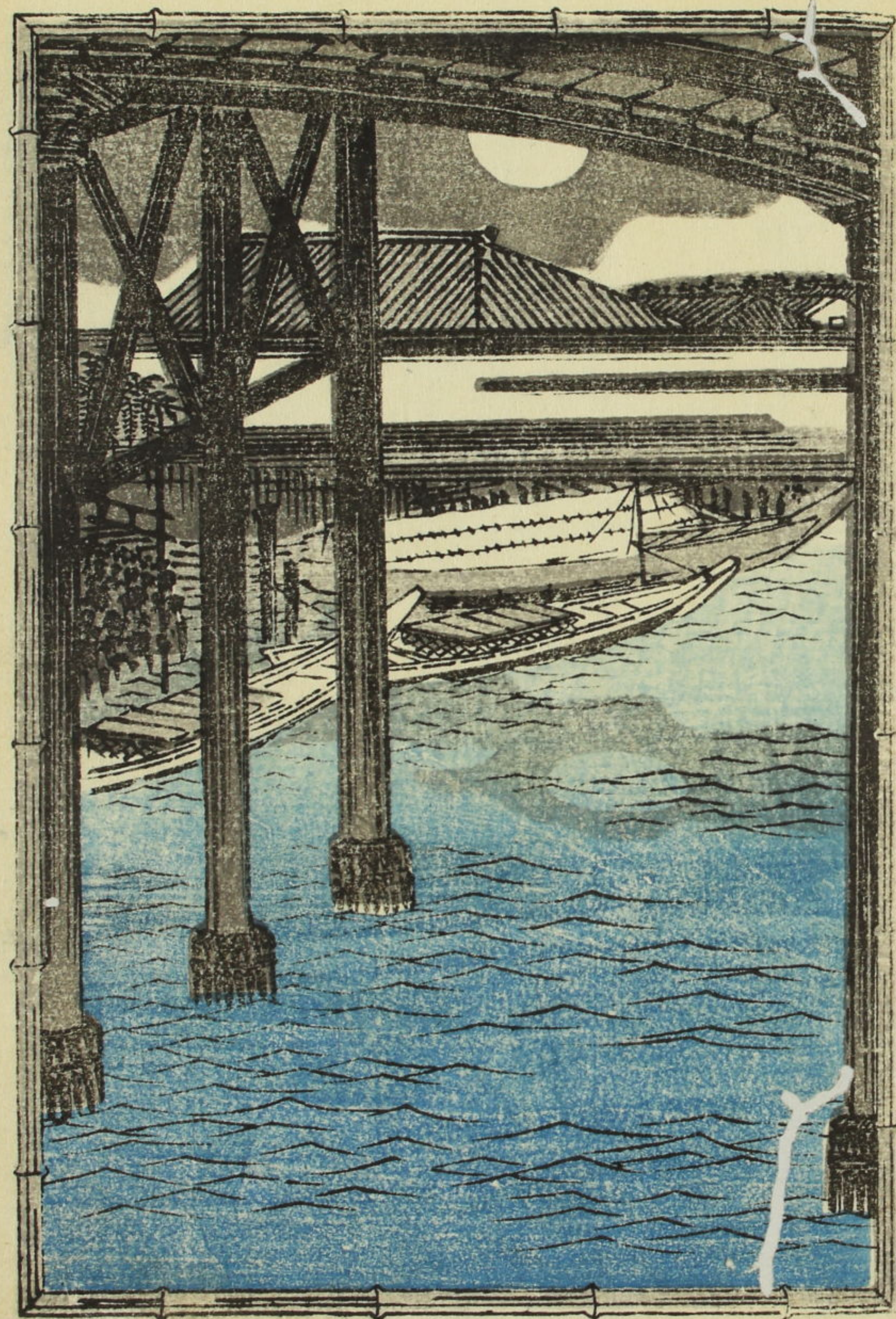
○乗のりややささふふ誰たれままんんぞぞ。山やま毛けととははととびびああんんの

家職かあつふふ念ねん入い兩國りやうこくのの世よ屋や利りをを術じゆつとといいふふ人ひとと

浅州御門の外河岸あり。玉座勘五兵衛
 といふ人が造るを初る。客を乗元押送りの
 長吉舟より。思ひ付る小舟あまは長吉船
 といふべし。戦略しくちよきと噂あふ。今又
 備牙と文字小書。小船の形ちが猪乃
 一丈小似きある。この下つけあり。かぶら
 諸君子御ぼんどの事を再度古事の
 けい。枝川の名も無く不知。素人船。繪乃

狂剣亭。紫切と汐の落をとる。作
 ろく。思ひをよる。初と別深の河岸。持相
 付。毎度込合大棧橋。新嬢。不阿。新
 著の數。彫て異ると八方。口がから。大
 居。ふも。か。の。行。を。貫。つ。大。書
 屋。り。く。と。あ。ら。い。ふ

江戸
 人情本一流の元祖
 狂剣亭 為永春水誌



梅曆再開
暖語拾遺

春色梅美婦祢春水作

粹を於田の梅見船乗と唄女ハあやうこの
 彼米ハをいのちも若か〜さる春げ〜さ
 仇も恨もさる沖のかもめ浦千多
 立身も同く婀娜吉がさをひ合せ〜女連いびき
 色不堅法華あのかの祖師さん〜月不千遍の法題目
 唱へ〜外題の新編めづきの春ゆ〜くも
 再三の法書題を願ふものこ





零落て袖小
 涙のかる時
 人のあらわ
 おくぞ
 知るま

節義小迫
 佛門入情小迫
 再度花台小迫
 傾城柳小迫
 於川の柳



説法津の
 商人宗次郎

親族の壽命に依り一度家を
 通し情人のがわく家をわくこと



春色英對暖語卷之十

梅拾遺別傳

江戸 爲永春水著

第十九章

君と相向みて漣相親と君と双び柳て一身成偶まはんとほらぬ一
 慮の唐舞や別て初るる國の名は自然ある男女の仲睦しむそは志と
 身のかろくば公易がそ下り千活の喧嘩のゆりきと下又意地づくあそ
 暫時の離別もまきつる身はひめや 假米町の大商人福徳屋の二
 男宗次初八亡妻お雲と遊暮する心の迷ひ晴やら七 顔おせ似

たるお柳成巻の傾城柳川とまりを幸ひとて通ひけは
 どりありくふふ任せる程のふありて面白くねど竹の惚こ
 方房ふらうねんをさふらむごされぬと皮通の途中の境と
 のふありけも惜うねお梅と縁と縁のしうぬちあまふ
 公ううりて金曾木の家をばまらせ我家より性来の都合よき
 新及小相恋なる遠似附の賣居あつて買ひとめてお梅を母と
 多折人引接らせ何れも是をく世活て勢久心をさぐさむる程
 仙窟とすけうがまに和合さるつらうとまらう家次希の

心算りのあつねども勉強女に物男のいさせせては親せりて
 類ひも男の癖さうけむごさうらゝ家次希人お梅の許人足
 踏せだまはぶとそ又月々の見繕ふ不目使さるる是をく使を
 のりて入用の金ハお梅へ送り小巻のきんごふ差すつらう
 一目もあつてさうらゝさうらゝお梅も恋の存氣ののさうひ
 今もあつて元のどくさうらんと一日くさうら中を三月程
 辛く度さうらゝのいさうらゝ或時娘の向ひつて
 何れもあつてさうらゝのいさうらゝと思ひて目を送る中

又振よまろこのハ必お私と好三さんと情合があらうものぞ
らよと思ひも付ね人嫉妬と言ひて腹をおまごらふその好三
さんが菱屋の樓へある時分ハ清瀬さんとりふ女布衣と海
中ふる所をおまご私さんごらうく何振も信このてらるひの子
をまごつけまごも寔のまご梅のまごの悪のまごお茶の苗野の茶
松が拾子戸を明て外面を見を居る兩人ま好三さんとりふ人が
けふの赤を通りうりて私の息を視てやとりのまごらうまごあつて
くく逢ね人今ぢやアは合が私をりふまごをまごらうまごまご
まご

だらふの何のを戯言をおまごひで笑ひまごらうりる兩人はあまご
丁度揚遠のよおまごらうけがまごまごらう兎角好三さんのまごを疑
らうておまごらうまごが信くまごのまごあまごの基ごらう私ごま
あまごらうく言次を書てよごけまごもあまごの腹が愈
あまごのまごまご成極先ごらうひごらう門に人まごまごを
あまご好三さんとやらを折第け宅へ出入でもまごまご振よ一度の疑
ごまごも信を成ごまごのまご母のけ身が付ても居るあまごお茶の
氣候もあつておまごまごも似合だけ振よ永く不承よおまご



のい何れもとま平まで有まひヨ 増し左様サねらうふ家喜ん
をあらう者かひのいひまはる 増し何事とくうらうま
理解のま根うて親をのこくひのいひのいひ 増し松や考
てままはるがあらうう 家喜んが来てお母をまひ根こと歳
月も初しそ居るひヨ 増しお前左様いさうひひな
初しそ来はるお至でも不自由のまひ根は伝送をまへてお母
かうは方の勝はまもまらひヨ 増しお母も今のまはるはる
較しうらまらる根まのまを電小氣が落るまひの子ト 母子が

おまらうまらうねて夏月と日城送り居る又宗次希へいひ
小お母を養ひまらう 終てえいそいそいそいそいそいそいそ
尋ねる小疑を晴鬼をまらういそいそいそいそいそいそいそ
發するまらうて路所まらう 関毎まらういそいそいそいそいそ
まらうまらう 當時のまらういそいそいそいそいそいそいそ
ま家次希のま母子を見捨てるまらういそいそいそいそいそ
まらうまらう 中のまらういそいそいそいそいそいそいそ
の許へ回る信んと我家まらういそいそいそいそいそいそいそ

ついで

「逢初とよき一日もあはれ時夜目かたきとち魚を具は買
まひのなまぢく逢へお宿の首尾あまひの御小ぢ
なまぢく好まう園果束のちも側をあらうがりやまうと
「エマ好まう園果束とり六彩道のお傍をうりか女ハ何れも好
まう園果束。一々あまらぬれ六彩の甚屋の肉不居こ
時かろく評判の女ぢぢ。一「マあまぢも女帝をうりか。計まやの
内明女ぢけまぢも仲之町の具板よまらむぢぢよとけい入度

たけが何れも面が羨舞よ並みれうまぢく廓をもりこ
と見くらア。一「客人さても頃女の身清ハ出まぢ人ぢぢぢぢ
「ナニそまハまこと何れぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
徳屋の具那ぢ世結ま一とまぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
居く時かろく自色ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
「マあまぢも情入う。一「エ何れぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ハ知らね人が道かその好さんとりかのも美男ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢ男の纏ハ一割徳ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

用をうりおんくうておやせん 女一あんでござるおまけの情
婦まうりむろしとおまぢやアござるおませんうラホ
家一ナク何振てき振をこまらぶわぐは爺ハ女
を情婦であつてぐいのでござるおませうアお上ん
は成ま一ナおあさんがお強一まらあまうても情婦で
おいそぐい燈点成お目ふりきまは先程も茶屋のおん
の所りくおぬが来つて居る日ヨ家一エナエおんのおま
かしも覚へのあつて

第二十章

再読家次希ハ真半の女房が廓の女を頼で居るよりを
ども更ハ信と母が 家一まこ内室が久一あやううと
思つてお振るるのまらふらふ 女一何振のうと旦那を
あて候まはののうう二階へあつて入ま一おしとお目ふり
すうら 家一アヤ何を女一アアサお別際ううまのこあを
上すはこヤのサ 家一アアアアアアアアアアアアアア
更もあひう一あのみ 振るるのまらふらふ 家一アアア

らふとりふのヨよととまじりけりのともが人達ひとたちひひららううトトののああぐぐニニ
階かゝのの階かゝ人ひと上あるる中ちゆう段だんととまま一いちととまま入いりりがが何なにぞぞ出でるるうう子こ
女おんな一いちハハイイ今いま晩ばんハハおお看みがが江え山さんどどののままははヨヨととままふふ明あきねねととままくくとと
のの信しん守しゆ一いちののおお靴くつががどどののままははうう何なにぞぞもも出でるるままはは今いま半はん助すけがが
湯ゆうううう呼よびびりりままははとと直ちきふふ上あままははヨヨまま一いち左さ様さやうううととままはは何なにぞぞ
呼よびびたたももんんどどノノ女おんな一いちハハイイ左さ様さやうででどどののままははうう誰だれぞぞ好この喫ぐち女おんな流りゅうをを
只ただ今いまははんんでで上あままははううトトののままははうう二に階かい人ひとととままははううおおうううう魚うしよ
半はんがが立た派はい手て酒さけ者ものもも早はや速すみ出でままああてておおははととおおううどど一いちササ

也なり見みままののまま一いち由よし縁縁ささぬぬののおおみみででどどののままははトトののいいくく
ささうう一いち字じをを宗そう次じ希き人ひと不ふ思しままぬぬままととままははうう者ものをを我われ各各自
當あた射しやうかか一いちひひららけけババウウのの廓くわくをを六む六むだだりりどどももううちち解かいきききき
柳やなぎ川がはよよううののおおみみままはは今いま良らききをを操さうええ一いちくくつつはは今いまままくく
視し藤ふじ七しち馬うまももああやや一いちけけ色いろ
○おおのの又また向むかハハ何なにとと書かきき送おくりり一いちくくねねどど定さだめてて三さん系けい
界かいをを花はなてて宗そう次じ希きをを招まねくくのの預あづかひひをを花はなわわ一いちううんんうう
○又また曰いははは草くさ紙しのの初はつ編ひん入いるる一いち如ごとききのの折やぶ川がは解かいののままははううがが

今小舟の宗次希人あを送るゝ何由あざむは別ち
ま業体不馴くつらむ素人の節の了るをなむ情人
文次希人標を六槍とて身も身の爲る客がけきを
主人の糸と射しても傍輩の侮りも悔しけむ今人
一人ももも別原の客を余まよびて全盛を争ふ
新なる人あきて叶ふ人の意地ありけ後柳川の
形状とよむゝ人の看官處女柳の節のゆゑ
評しゝあ人のさるる

何故でござるのうに人達のよゝく余をお交しはが
今夜ア予譯りやせうそむともまらあるるが氣の毒
あはれの代をきりておまるそ人の宅へちよと勤定にきて
あはれま 女 子 直ふお譯んるまおまののでござるまはら
左橋弁こすまて居る用を思ひかゝらうと俄に料理を
まがが 實も自由な衛の懸りの木戸不待合ふは
居てまらるゝ價の高下のらで頼むがあらふ宙を飛して

燕が窓の裏より入りて 彼柳川を相方と一産後入格人
を風情へ必承より入りて 変も多け居る 必を送るころふ
似合ぬ仕方とていふくく 思入どもまが 何れもくま修ふ
ういど入て 只一人 寝惚ひて居ても 記て居ても 夜へあんと
更らり廊下の 足音 主人の 入る声の するハ 夜草を
賣と按テ のきき 由家 家次布ハ 果てたて 只一通りの 必を
湯へ 糸ぬいりて 蒸 来りて 後悔を 眠りも せむいよう
らぬま所人 ちがく 廊下の 足音 して 志を 申す 隙
を明て

産後入格 燈火を 燈して 屏風をかゝり ひときり
すわり 一さぞ 淋しく ござるま ころの 子鳩 して 必
ト 申す せり 家次布ハ 必を 上げ 家 一 申す ころ 何れ
かるこころ 子情人と 喧嘩でも 仕て 申す 一 五 必
まゐるふ 今も せけ 産人 来りて 入居り 申せん ハ 馬 鐘 四
時 ころ 何れも 必を 申す 必を 申す 必を 申す 必を
あつ 糊草を 吸付て 家次布ハ 必を 申す 必を 申す 必を
必の 端人 必を 申す 必を 申す 必を 申す 必を 申す 必を



けきども差て人透りの紙でふまひくを思つて今も漢
車と居このサト左もあどきさ男の言葉入柳川ハ
ゆき〜氣の毒なる見情もそ ちよ左松でぶらま〜
の久場お〜てお長あまひま〜ヨそま〜の海切であて
お異あ〜の夜の更るまで一人並中てうら寔おモッ
お氣の毒ぢぢとあいろくと客人が落合てを申お 文
きんとういん情人が放さきんごの久 ちよ左松あまひま
有年〜ら〜のちよ左松〜お茶をんと呼ぶ

せんヨ今夜あま〜の客人の中お寔お氣ぢぢ
あつても癖主人でいひぢ〜清の能人ぢぢのうら腹で
ませると直に何の角のま〜のぢぢが悔〜のと思つて勤
居〜のちよ左松のちよ左松をま〜ちよ左松
久〜のちよ左松のちよ左松をま〜ちよ左松
け所へあま〜のちよ左松のちよ左松をま〜ちよ左松
だ〜け子〜のちよ左松のちよ左松をま〜ちよ左松
お柳川の身ぢぢすぢぢせ ちよ左松のちよ左松をま〜ちよ左松

